

白山山地伝承毛鉤の謎

The mystery of Kebari in the Hakusan Mountains

白山山地（加越山地、加賀越前山地とも呼ばれる）は石川、福井、岐阜の三県にまたがる山域であり、山地を代表する白山（2,702 m）は霊峰として崇拜され、加賀、越前、美濃から白山山頂をめざす三本の登拝道（禅定道）が開かれ、現在も登山道として利用されています。

越前側からの登拝道にあたる白峰地区の市ノ瀬（白山温泉）は古くから湯治場として多くの登拝者に利用されてきました。白峰地区を流れる牛首川は手取川水系上流部の河川で明治から大正時代（1868 - 1926）には旅館にイワナをおろす多くの川漁師が生まれ、岐阜県境の分水嶺を越えて宿泊して尾上郷川や大白川へと出漁したり、福井県側へは九頭竜川の支流の滝波川や打波川へ出漁しましたが、距離的にはそれほど遠くないにもかかわらず石徹白川への出漁の記録がないのは、古くから石徹白地区は美濃側との交流が密接であったことや職漁師がいたことなどに起因しているのかもしれない。白峰地区の牛首川では綿羽（ウエツブ）も一緒に巻かれたハシボソガラスの頭羽の毛鉤が使われていました。

美濃側からの登拝道の間にあたる石徹白地区は岐阜県および福井県を流れる九頭竜川水系の河川である石徹白川の上流部に位置し、古くから多くの登拝者を集めて賑わってきたところです。昭和33年（1958）に石徹白村の大部分が福井県から岐阜県白鳥町（現、郡上市）に合併されました。石徹白川は大正8年（1919）大同電力勝原堰堤、大正12年（1923）矢作電力下山堰堤など下流部のダム建設によって、サクラマスの遡上がなくなったことによりヤマメが激減したため、昭和4年（1929）に漁協組合長の須甲末太郎氏は白鳥町の職漁師の生田青柳氏に依頼し、長良川産のアマゴが移入されました。その後も何度か放流が行なわれて、アマゴの餌釣りの伝統釣法である「郡上釣り」も伝播しました。石徹白川では白い綿羽の蓑毛が巻かれた毛鉤が使われていましたが、昭和10年代（1935）に職漁師の久保田友芳氏によって行われた毛鉤釣りは「郡上の毛鉤」によく似た毛鉤が使われていて、アマゴの移入と同時期に伝播したのではないかと推察しています。

白峰地区の牛首川で使われた綿羽（ウエツブ）も一緒に巻かれたハシボソガラスの頭羽の毛鉤と、白い綿羽の蓑毛が巻かれた石徹白川の毛鉤は他では類を見ない非常に珍しい毛鉤です。白峰地区と石徹白地区に交流があったとすれば、二つの毛鉤の類似性の説明は容易ですが、もし交流がなかったとしたら、同じような発想の毛鉤が、しかも隣接する地域でどのようにして別個に生まれたのか、二つの毛鉤の起源や関連性の有無が気になりますが真相は謎です。

加賀側からの登拝道は中宮（吉野谷村）から尾添（尾口村）をへて尾添川支流のハライ谷の中を通過していたため、昭和9年（1934）の大洪水により廃道になっていましたが、昭和62年（1987）に谷をはさんだ尾根伝いの二つの径に変わっています。廃道になっていたためか、中宮地区や尾添地区には伝承された毛鉤の情報は発見できません。

参考資料：

鈴野藤夫（1993）.『山漁：溪流魚と人の自然誌』農山漁村文化協会.

鈴野藤夫（2000）.『峠を越えた魚：アマゴ・ヤマメの文化誌』平凡社.

橋礼吉（2005）.「手取川源流域におけるマス・イワナ漁について：奥山人の溪流資源の利用例 その1」,『石川県白山自然保護センター研究報告』32, 石川県白山自然保護センター.

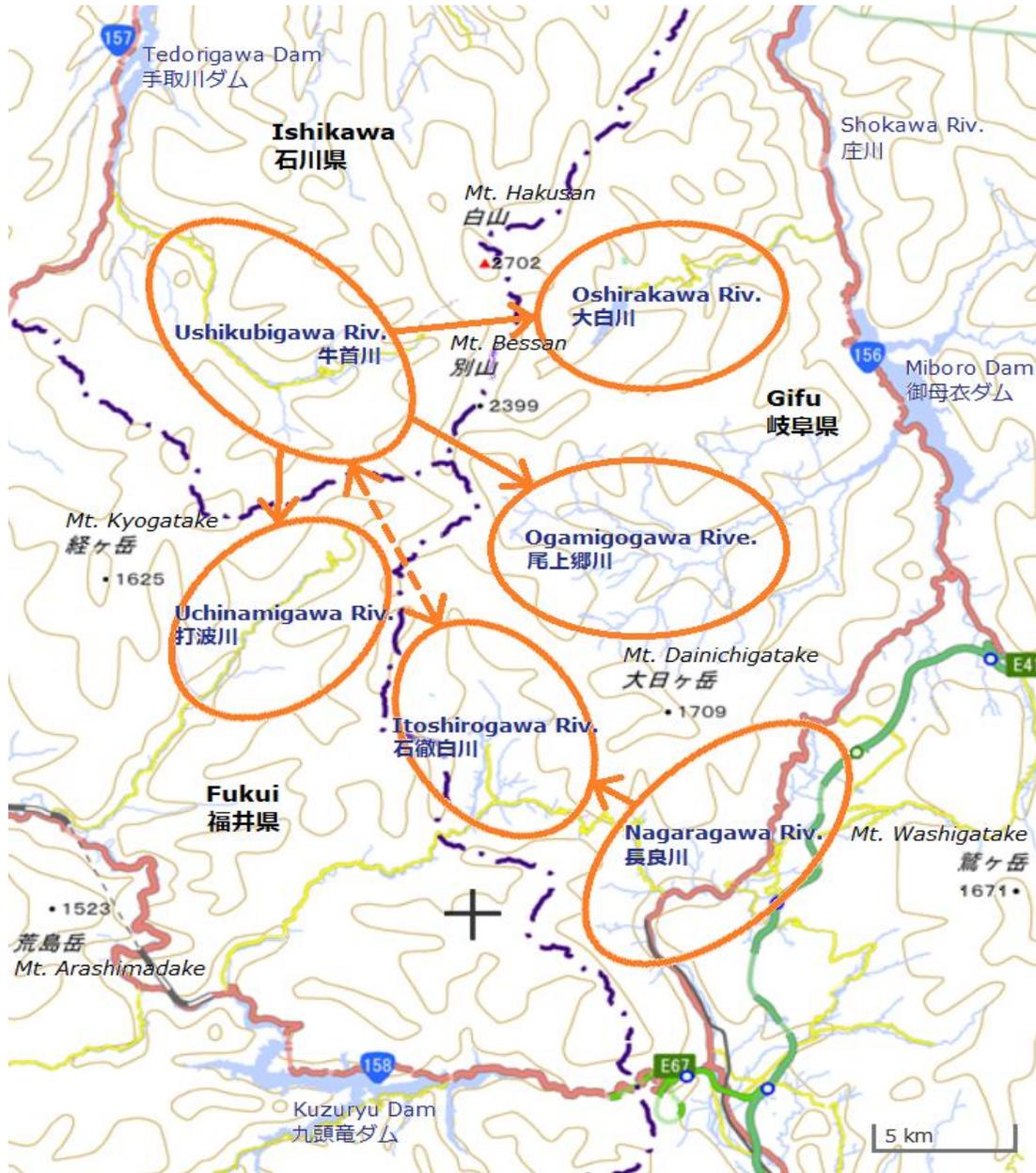
橋礼吉（2006）.「手取川源流域におけるマス・イワナ漁について：奥山人の溪流資源の利用例 その2」,『石川県白山自然保護センター研究報告』33, 石川県白山自然保護センター.



**Hakusan Shiramine area
Ushikubigawa River**



Okumino Itoshiro area



This map is a reproduction of the GSI Map published by Geospatial Information Authority of Japan.
国土地理院の電子地形図(タイル)に河川名などを追記して掲載



Okumino Itoshiro area



**Mino Gujo area
Nagaragawa River**